〈研究ノート〉

介護福祉士養成課程における学習環境づくりに関する研究

――親和動機を用いた協調学習環境の実現を目指して――

清　水　香　織*，家　高　将　明**，
三田村　知　子*，宗　清　芳　美***

Study on Creating a Learning Environment at a Care Worker Training School

――Realizing a Collaborative Learning Environment Using the Affiliation Motive――

Kaori Shimizu, Masaaki Ietaka, Tomoko Mitamura and Yoshimi Munekiyo

要旨：本稿は協調学習について着目し、介護福祉士養成教育における協調学習の有効性について検討を行うとともに、協調学習に基づく学習環境を促進するための要因について検討を行い、協調学習に基づく学習環境を実現するための方法について言及を行うことを目的としている。その上で本稿は、先行研究を用いて協調学習における学習効果について整理を行い、介護福祉士養成教育における協調学習の有効性について検証するために、協調学習を行った後の学生の振り返りによる分析を行った。その結果、介護福祉士養成校の学生においても協調学習における同様の効用が得られることが示された。また、学生の親和動機によって協調学習における効果がより有効に機能することを指摘する先行研究を受けて、実態調査を行い、入学初期に行った宿泊校外学習が学生の親和動機の低下を防止する役割を果たしていることを確認した。そして協調学習に基づく学習環境を実現するために、入学初期の時点において学生に対して協調学習がもつ意味とその有効性について十分に説明した上で、学生の交流を促すためのプログラムを設定し、教員がグループの評価を適宜行い必要な介入を行うことが重要であることを指摘した。

Abstract : The purpose of this study was to examine the effectiveness of a collaborative learning environment at a care worker training school and to examine methods for realizing a learning environment based on collaborative learning. In this study, the effectiveness of collaborative learning at the care worker training school was investigated. The results revealed that a similar effect to those in collaborative learning were seen in the students of the care worker training school. A preceding study pointed out that collaborative learning functions more effectively in conjunction with the affiliation motive of the student, and this study took to undertake an investigation of this reported result. The results revealed that ex-

*関西女子短期大学　助教
**関西医療技術専門学校　教員
***関西女子短期大学　教授

tracurricular study prevents degradation of the affiliation motive of the student.

Key words：協調学習 collaborative learning　介護福祉士養成教育 care worker training　親和動機 affiliation motive

はじめに

少子化や大学全入等を背景に、1999 年頃から高等教育機関における学生の学力低下が顕在化している。市川は、学力低下の根本問題として「学習意欲の減退」を挙げている[1)]。平成 19 年度私立大学教員の授業改善白書においても、学生に関する問題点として「基礎学力がない」、「学習意欲がない」という指摘が上位を占め課題となっている[2)]。

また学習の継続は、その前提条件となる学習環境への適応といった基盤づくりが重要であるが、学習環境の変化に適応することが出来ず、精神的健康を維持できない学生が目立つようになっている。特に急激な環境の変化を伴う入学直後等において、不安感や緊張状態が過度に続くために、気分や集中力が減退する、感情が不安定になるといった精神的な不健康状態を呈し、学習に支障をきたす学生も珍しくない。そしてこうした傾向は、介護福祉士養成教育の場においても例外ではない。

一方で介護を取り巻く環境は変化し、支援に対する効果及び成果が求められるようになってきている。そうした中、2006（平成 18）年に社会保障審議会福祉部会から「介護福祉士制度及び社会福祉士制度の在り方に関する意見」が出され、12 項目からなる「求められる介護福祉士像」が示された。そしてこの報告は、介護福祉士養成教育に高度化・多様化した介護ニーズに対応できる能力及び、より高いレベルの判断力や思考力の育成を求めている。

高度な専門職養成が求められる介護福祉士養成施設は、学生自身の様々な学習に関する基盤が脆弱化する中で大きな困難に直面している。こうした問題を解決するためには、学生に対する早期の介入を行い、専門職養成課程における学習環境への適応を促し、学習意欲及び学習に必要な基礎的なスキルを高めることが必要である。そしてこの問題への対応は、学生個々の取り組みよりも、複数の学生が相互に学び支え合うことが有効であり、その実現のために協調学習に基づく学習環境の形成が求められる。

本稿は協調学習について着目し、介護福祉士養成教育における協調学習の有効性について検討を行うとともに、協調学習に基づく学習環境を促進するための要因について検討を行い、協調学習に基づく学習環境を実現するための方法について言及を行うことを目的としている。介護福祉士養成教育における協調学習の有効性について明らかにし、協調学習に基づく学習環境を実現するための方法について検討を行う本稿は、介護福祉士養成施設に対する社会の期待と学生における状況との乖離が進む中で、一定の意義をもつと考える。

Ⅰ　介護福祉士養成教育における協調学習の有効性

1. 協調学習における概念整理

協調学習とは、複数の学習者が互恵的に学び合う学習形態を指すが、そこには協同学習といった類似した用語がある[3)]。こうした類似した用語の存在は、教育現場だけでなく研究者の中でも混乱を招いている。ここでは協調学習についての概念整理を行うことを目的として、協調学習と協同学習における関係性についてみる。

まず協同学習の定義についてみる。協同学習は「同一の目標や分担した目標を達成するために学習者が他者と相互に関わり、影響を与えあいながら学んでいく学習である」と定義されている[4)]。これに対して協調学習は「学習者がグ

ループ活動の中で互いの学習を助け合い、ひとりひとりの学習に対する責任を果たすことで、グループとしての目標を達成していく、協調的な相互依存学習である」と定義されている[5]。この 2 つの定義から協同学習と協調学習は、個々の学習者における責任を果たしつつ、相互に関わりながら学習をすすめる過程であり、ほぼ同義の概念であると思われる。

しかし関田は協同学習と協調学習の関係について、協調学習を協同学習を含む包括的な概念として位置づけている[6]。そして協同学習について「協力して学び合うことで、学ぶ内容の理解と習得を目指すと共に、協同の意義に気づき、協同の技能を磨き、協同の価値を学ぶことが意図される教育活動である」とした上で、協調学習について協同学習の意図や条件に囚われず緩やかな協力関係の下で行われる学習活動であるとしている。また安永は両者の関係について、協同学習を「学習場面の構造化を高め、学生の学習活動を一定の方向に導く」学習として位置づけ、協調学習を「できるだけ構造化を避け、学生の学習活動に自由度を与える」学習であるとしている[7]。さらに安永は、両概念の間に明確な基準がないことを指摘している。

関田及び安永の両指摘における共通した事項は、協調学習を協同学習と比して緩やかな概念として位置づけているところにある。つまりほぼ同義の概念であると思われる協調学習と協同学習の相違は、集団における学習形態の柔軟性にあるといえるだろう。そして本稿の目的は、介護福祉士養成教育における複数の学生が相互に学び合う学習形態の有効性について検討することにあり、そこでは両概念の相違は本質的な意味をもたない。よって本稿は、両者について明確に区分するのではなく、協同作業が組み込まれたメンバー間の相互作用に基づく学習形態を協調学習として捉え、論をすすめることにする。

2. 協調学習の効果と介護福祉士養成教育における有効性

協調学習の効果についてみると、協調学習は様々な識者によって学習効果をよりいっそう高めることができることが指摘されている。また学習者の社会性や協調性、共感能力を高めるとともに、他者理解のための能力や他者からの期待に対する感受性の向上を図ることができることも報告されている[8~10]。さらに Johnson らは、協同学習によって学生の在籍率が高まることを指摘している[11]。

そして協調学習の中でこれらの効果が得られる過程についてみると、学習場面における学生間の支えあいが学習効果を高め、さらに抽象的な学びの内容を参加者が多様な言葉によって語ることで個々の参加者は学びの内容をより具体的に理解することができる学習効果が得られるのである。またグループ間における積極的な他者との交流が行われる中で、個々の学習者の社会性や協調性が養われ、加えてグループが協同して課題解決を図る中で他者の意見に共感する能力も養われる。さらにグループ間における他者との交流の中で、個々の学習者は他者の物の見方や考え方、反応の仕方の多様さを知ることができるとともに、グループ活動の中で他者からの期待に応えることが求められることにより、他者の期待に対する社会的な感受性を養うことができるのである。そしてこれらの効果は、グループ間における他者との交流を基本としており、この交流の中での支えあいが学生生活に関する不安を軽減し、在籍率の向上につながるのである。

しかしこれらの協調学習における学習効果は、単にグループ活動を行なうだけでは得られない。Johnson らは、協調学習の学習効果を得るために不可欠な要素として促進的相互交流を挙げている[12]。ここで指摘される促進的相互交流とは、グループの目標達成のために課題の達成や完遂に向けた取り組みを励まし促し合う人々が生み出す相互作用を指す。また三宅も同

様に、協調学習について「建設的な相互作用」が重要であることを指摘している[13)]。

次に介護福祉士養成教育における協調学習の有効性について検討したい。介護福祉士の役割は、単に利用者の生活を営む上で支障のある部分を介護技術によって補うことだけが役割ではなく、その関わりの中で利用者の思いや価値観を受けとめ、彼らに寄り添い、生活上の課題について共に立ち向かうところに大きな意味がある。実際に介護福祉士養成教育において、倫理観や感受性を高めるような基礎力育成に重点を置いた教育課程が不可欠であることが指摘され[14)]、さらに介護福祉士のあり方及びその養成プロセスの見直し等に関する検討会[15)]によって示された「資格取得時の介護福祉士養成の目標」においても、利用者理解や高い倫理観を身につけることの必要性について強調されている。

つまり介護福祉士養成教育は、専門的な知識・技術を習得させることだけが目的なのではなく、他者を尊重し、理解し、共感するための基礎的な能力を獲得させることが求められている。そして学生の社会性や協調性、共感力、他者理解のための能力、感受性を養うことのできる協調学習は、介護福祉士養成教育において重要であり、不可欠な視点であるといえよう。さらに学習環境への適応に困難を抱える学生が増える中で、学生間における支え合いによって、学生の不安とストレスを軽減することのできる協調学習は有効な手段となる。

3. 介護福祉士養成校における学生に対する協調学習の効果の検証

これまで、介護福祉士養成教育における協調学習の有効性についてみてきた。しかしこれらの有効性は先行研究から導きだされた結果であり、この結果を単純に介護福祉士養成校の学生に当てはめることには些か疑問が残る。そこでここでは、介護福祉士養成校における学生に対する協調学習の実際的な効用をみるために、筆者らが所属する養成校において初年次教育の一環として実施している協調学習を盛り込んだ宿泊校外学習に着目してみたい。そしてこれらの期待される効用は、量的なデータによって明らかにすることが難しいことから主観的な側面は免れないが、2010（平成 22）年度に実施した宿泊校外学習最終日に行った学生の振り返りを材料として、協調学習の効用について捉えていきたいと考える。

この宿泊校外学習は、協調性や共感といったスキルは座学などの講義形式では獲得することが困難であること、またこれらのスキルは一朝一夕で身につくものではないことから、初年次教育の一環として協調学習を意識したグループ活動を基本として実施している。

そして具体的なスケジュールは、表 1 に示した通りであるが、宿泊校外学習は大きく分けて、「マナーを体得するための取り組み」と「人間関係の構築を図るための取り組み」に分けられる。マナーを体得するための取り組みは、講義形式でマナーを学ぶことの意義や具体的な方法について学習を行っている。人間関係

表 1　宿泊校外学習のプログラム

1 日目	2 日目
12 : 00　現地到着 グループ単位での昼食 13 : 00　オリエンテーション 宿泊校外学習のねらいや注意点の説明 13 : 30　マナー講座 14 : 30　人間関係構築のためのプログラム① 19 : 00　人間関係構築のためのプログラム②	8 : 30　グループごとの部屋の片づけ 9 : 00　人間関係構築のためのプログラム③ 13 : 00　振り返り 14 : 00　現地出発

の構築を図るための取り組みは、3つのプログラムを設定している[16]。1つ目のプログラムは、学生生活における基本的な姿勢や態度について学習することを目的として、学校生活における日常的な場面を実行委員のメンバーが演じて、各班で誤っている点を指摘するというゲーム形式で行っている。2つ目のプログラムは課題を設定し、グループのメンバー同士が意見を出し合い、コンセンサスを得ながら課題を達成する演習をさせている。3つ目は、複数のチェックポイントにある課題をメンバー同士が協力し回答しながらゴールを目指すオリエンテーリング形式で行っている。そして宿泊校外学習最終日に学生に振り返りを行わせている。つまりこの宿泊校外学習の取り組みは、まず講義形式のマナー学習によって、挨拶や言葉遣いなど対人関係を形成するための基本的なポイントについて学習した上で、学生がグループに分かれて3つのプログラムについて取り組む形式となっている。そして3つのプログラムに対して取り組む中で、学生同士が相互交流を図りながら協同作業を進める過程は、協調学習の一環として位置づけることができる。

協調学習の効用について見るために、宿泊校外学習における学生の振り返りの代表的なコメントを表2で示した。学生の振り返りコメントからわかるように、協調学習は学生が他者理解や協調性の重要性を再認識する機会となるとともに、学生の社会性を育み、学習理解を促す効果があることがわかる。

具体的には、「他者の思いや考え方に気づくことができた」、「相手に対する思いやる力が必要になってくると思った」といったコメントから、学生が宿泊校外学習を通して他者理解の重要性について再認識する機会を得ていることがわかる。また「誰か一人でも欠けるとうまくいかない」、「一人ひとりが他者の意見に反発せずに受けとめることが重要」、「色々言い合える雰囲気をつくることが大切」、「誰かがやってるから、自分はやらなくていいという考えじゃなくて、みんなで同じことを考えたり、案を出したりすることはすごく重要」といったコメントから、協調性についても同様の機会を得ていることがわかる。さらに学生の「自分の立場・役割を考えて行動していきたい」や「他者と一緒に考えることでより一層考えさせられた」といったコメントから、協調学習が学生の社会性を育み、学習理解を促す効果があることがわかる。

表2　振り返りシートにおける学生コメント

comment 1	チームが一丸となって取り組むことで、これまで気づかなかった他者の思いや考え方に気づくことができたように思います。
comment 2	一人ひとりの視野を広げて気づく力や相手に対する思いやる力が必要になってくると思った。
comment 3	誰か一人でも欠けるとうまくいかないし、自分の意見をはっきりいって、かつ他の人の意見も聞いて話し合いながら理解していくのがとても必要だと思った。
comment 4	チームの団結力を大切にし、一人ひとりが他者の意見に反発せずに受けとめることが重要であると気付きました。
comment 5	もっと周りをみて、色々言い合える雰囲気をつくることが大切だということに気付いた。
comment 6	誰かがやってるから、自分はやらなくていいという考えじゃなくて、みんなで同じことを考えたり、案を出したりすることはすごく重要だと思った。
comment 7	全体をふりかえると、一人ではできないことばっかりだし、グループの人とかかわらないとどうにもできないことばっかりで、会話とか話し合いが本当に大切だと思った。
comment 8	今後、クラスみんなで何かするときなど、クラス一人ひとりの意見をしっかりと聴き、そして自分の意見をみんなが理解してくれるよう分かりやすく話をしようと思います。
comment 9	私は積極的に行き過ぎて自分の役割を見失っていた。これからは自分の立場・役割を考えて行動していきたい。
comment 10	他者と一緒に考えることでより一層考えさせられた。

またこの他にも、宿泊校外学習に行く前にクラスに馴染めるか強い不安を示していた学生が、宿泊校外学習におけるグループ活動を体験することによって人間関係に関する不安が軽減し、少しずつでも関わっていきたいという意思表示するケースをみることもできた。

よって学習効果や社会性や協調性を高め、他者理解のための能力や感受性を養い、学生の不安とストレスを軽減することができるといった協調学習の効用は、介護福祉士養成校の学生にも当てはまると言えよう。

Ⅱ　協調学習における学習効果を促進するための検討

1. 協調学習と親和動機の関係

これまで協調学習の活用が、介護福祉士養成教育において有効であることをみてきた。そして協調学習における学習効果をより効果的に活用するためには、協調学習を促進するための方法について検討することが必要となる。

学生の積極的な交流を基盤とする協調学習は、学生の他者に対する関心を前提として成り立つものである。森らは入学当初の学生が新しい環境を体験する中で、仲間と仲良くなりたい、仲間に認めてもらいたいと親和動機を強くもつことを指摘した上で、その動機によって学生間のかかわりが促され、グループ学習の中で学習の成果がグループ全体に還元される可能性があることを報告している[17]。ここで指摘される親和動機とは、「他者に近寄り、友好的な人間関係を築き、維持しようとする欲求」である[18]。

そしてこの森らの報告に従えば、入学初期において高まる親和動機をうまく活用することによって、学生同士のかかわりを促すことができ、介護福祉士にとって欠くことのできない専門的スキルを習得するための機会をより効果的に、また早期につくることが期待できる。

2. 親和動機を基盤とした学習環境の形成

これまでみてきたように、入学初期は学生の親和動機が高まり、これによって初年次教育における協調学習の効果は有効に機能することが指摘されている。本学における宿泊校外学習によって良好な学習効果がみられた結果も、これに準ずるものであると推察される。森[19]は学生の親和動機を学習の動機づけに利用することができると指摘しているが、親和動機は新しい仲間や環境という特殊な状況において生じる高揚感により自然に高まり、次第に和らぎ低下していく性質をもつことを指摘している。つまり親和動機が学習の動機づけとして活用することのできる時期は限定されており、入学当初に限られるといえよう。しかし仮に親和動機の低下を防ぎ、これを維持することができれば、学生間における強いかかわりが行われる学習環境を保持することが可能となる。

入学初期に親和動機が高まり、やがて和らぎ低下していく要因の一つには、入学初期に親和動機が高まり、学生間における交流が促進することによって、一定の他者理解がすすむことで他者への関心が薄れていくことが関係していると思われる。しかし人間は多様な側面をもつ存在であり、関わることによって相手に対する関心が高まることも考えられる。つまり学生同士が多様な側面を互いに見せつつ、協力して学習を進める協調学習を実施することで学生の他者への関心は高まり、学生の親和動機を維持・向上することができる可能性は否定できない。

そこで次に、初年次教育において協調学習を用いた本学の宿泊校外学習が、学生の親和動機の形成に寄与しているかについての検討を行うことを目的として実施した実態調査の結果についてみる。

①研究方法

対象者：

宿泊校外学習を実施した本学（2 年課程専門学校）1 年生 24 名および宿泊校外学習を実施しない介護福祉士養成校の A 校（2 年課程短

期大学）1 年生 29 名、B 校（2 年課程専門学校）1 年生 22 名

調査方法：

親和動機の形成に対する宿泊校外学習の有効性を検証するために、宿泊校外学習における前後の測定を行う縦断的方法による調査を行った。そして宿泊校外学習を実施した本学及びその他の養成校に対して、4 月 19～22 日に初回調査を実施し、追跡調査を 5 月 17～21 日に実施した。

倫理的配慮：

調査対象学生に対して、無記名で調査を実施すること及び調査データを研究目的以外で使用しないことを口頭にて説明し、同意を得た上で実施した。

調査項目：

親和動機尺度として、杉浦の親和動機尺度[20]を参考に「人とつきあうのが好きだ」、「人と本音で話せる関係でいたい」、「人と深く知り合いたい」など、人と親密な関係を維持したいという気持ちについての 9 項目（表 3）からなる調査票を作成した。回答は、「とてもそう思う（5 点）」、「そう思う（4 点）」、「どちらでもない（3 点）」、「そう思わない（2 点）」、「全くそう思わない（1 点）」の 5 段階で求めた。得点範囲は 9～45 点であり、得点が高いほど親和動機が高いことを示している。

②調査結果

まず追跡調査対象者 75 名の特徴についてみていきたい。本学は男性 12 名、女性 12 名、平均年齢 20.3 歳であった。A 校は男性 25 名、女性 4 名、平均年齢 18.9 歳であった。B 校は男性 7 名、女性 15 名、平均年齢 23.2 歳であった。各校の特徴をとりあげるならば、本学は男女比のバランスが取れており、A 校は男性が多く、B 校は女性が多い養成校であることがわかる。また年齢については、B 校は他の養成校と比べやや学生の年齢が高くなっている。

表 3　親和動機尺度における設問項目

1. 人とつきあうのが好きだ
2. 人と本音で話せる関係でいたい
3. 友達に自分の考えていることを伝えたい
4. 人と深く知りあいたい
5. 友達と喜びや悲しみを共有したい
6. 知り合いが増えるのが楽しい
7. できるだけ多くの友達をつくりたい
8. 友達と非常に親密になりたい
9. 一人でいるよりも人と一緒にいたい

表 4　宿泊校外学習実施前と実施後における親和動機得点の平均値差

	初回調査時	追跡調査時	スコアの差
本学	34.58	33.96	－0.62
A 校	37.55	36.46	－1.09
B 校	35.44	34.41	－1.04

次に、アンケート実施前後の学生の親和動機に関する変化を表 4 に示した。宿泊校外学習を実施した本学、宿泊校外学習を実施しなかった A 校・B 校のいずれも、親和動機が実施前より実施後に低下した。スコア低下幅は本学（－0.62）、A 校（－1.09）、B 校（－1.04）であった。

③考察

いずれの学校においても実施前より実施後の親和動機は低下をしていることから、親和動機を形成するために宿泊校外学習は有効に働いていないようにみえる。しかしこの結果は、上述したように入学初期に親和動機が高まり、やがて和らぎ低下していくという親和動機の特性に関連している。森は親和動機について、親和動機は新しい仲間や環境という特殊な状況において生じる高揚感により自然に高まり、それが和らぎ低下していくものであると指摘した上で、学校生活における 1 年間の後半において親和動機を基盤とする学習コミュニティの求心力が低下することを報告している[21]。そして宿泊校外学習を実施した本学は、親和動機の低下の幅が少ないことから、宿泊校外学習という取り組みが親和動機の低下を防止する一定の役割を果たしたものであると見なすことができる。

よって親和動機の低下を防止する宿泊校外学

習は、学生間における強いかかわりが行われる学習環境を保持する役割を果たしており、これによって協調学習における学習効果をより有効に機能することが期待できると言えよう。

結　　語

本稿はこれまで、先行研究を用いて協調学習がもつ効果について整理を行うとともに、これを活用した宿泊校外学習において先行研究が指摘する同様の効果が得られることを確認してきた。そして学習の基盤が脆弱な状況にある学生が多く存在する中で、高度な専門職養成が求められる矛盾した状況を抱える今日の介護福祉士養成教育において、学生が相互に学びを支えあう協調学習は有効な教育手段となることを見てきた。また本稿は、学生の親和動機を活用することによって学生間のかかわりが促され、協調学習の効果がより有効に機能することを指摘する先行研究を受けて、実態調査を行い、入学初期に行った宿泊校外学習が学生の親和動機の低下を防止する役割を果たしていることを確認した。介護福祉士養成教育にとって有用である協調学習の効果を継続し、より発展させていくために、入学当初からの協調学習を意識した教育方法の活用が有効であることをこの結果は示している。

これまで協調学習の教育効果について目を向けてきたが、一方で集団が生み出すネガティブな問題が指摘されていることについて考えておく必要がある。例えば、集団内で一部のメンバーによる手抜きが生じることで集団での課題遂行機能が低下することや、雰囲気に流されて少数の意見が反映できなくなる集団同調の問題が指摘されている。さらに周りの変容やまとまりを目の当たりにして、ダイナミックスに乗り切れない学生は、より疎外感が増す可能性もある。こうしたネガティブな問題は、協調学習における意義を十分に理解していないことから生じている可能性が高く、競争中心の教育や個を偏重する教育環境の中で育ってきた学生が、他者と協力して理解を深めたり、問題を解決したりすることを必ずしも良いこととは考えていない可能性も考えられる。

そして協調学習がもつ学習効果に加えて、こうしたネガティブな側面を含めて考えるならば、本稿の中で指摘した協調学習をより発展させていくための入学当初からの協調学習を意識した教育方法の活用は、単に交流を促すためのプログラムを設定するだけでなく、他者と協力しあい、助け合うことの意味とその働きについて十分な説明を行うことを求めるとともに、グループの評価を常に教員が行い、学生への直接的な働きかけをすると同時に、適宜変更するなどの関与を求めている。とりわけ疎外感を感じている学生の把握とフォローアップを早期に講じることが、協調学習をより効果的に行うためのポイントであると考える。

最後に本稿の限界について見ていきたい。本稿は協調学習の効果について整理を行い、親和動機によって協調学習による効果がより有効に機能することを指摘し、宿泊校外学習が親和動機の低下防止に有効であることを確認した。しかし本稿における結果の多くは、先行研究による知見に基づくものであり、実証的に検証したものではない。また宿泊校外学習の学生における振り返りから、協調学習の効果について再検証した結果も主観的な解釈に基づいており、さらに各コメントが宿泊校外学習におけるいずれのプログラムによるものであるのかについて特定することができなかった。よってこれらの結果は、信頼性に欠けることから、結果の一般化には慎重にならなければならないと言えよう。そして宿泊校外学習における親和動機の低下を防止する効果についても、サンプル数が限られた中での結果である。今後これらの限界点を踏まえ、より精度の高い研究を進めていきたいと考える。

注

1）市川伸一「学力低下と学習意欲」『指導と評

価』2002 年 5 月号　pp 17–20
2）私立大学情報教育協会『私立大学教員の授業改善白書』2008 年
3）協調学習及び共同学習は、グループ学習の下位概念として位置づけられる用語である。そしてグループ学習は一斉学習と個別学習の中間に位置づけられる概念であり、一斉学習が学習者の学びを受動的なものとし、競争的関係を生み出してきたという反省から生まれた学習形態である。（瀬戸知也「集団学習」『教育学用語辞典』学文社　2006 年　p 124）
4）加藤寿朗「協同学習」『教育用語辞典』ミネルヴァ書房　2003 年　p 147
5）尾澤重知「コラボレーション」『新教育事典』2002 年　pp 309–314
6）関田一彦　安永悟「協同学習の定義と関連用語の整理」『協同と教育』第 1 号　pp 15–19
7）安永悟「協同による大学授業の改善」『教育心理学年報』第 48 集　2009 年　pp 163–172
8）D. W. Johnson 他著　岡田一彦監訳『学生参加型の大学授業　協同学習への実践ガイド』玉川大学出版　2001 年
9）秋田喜代美『子どもをはぐくむ授業づくり』岩波書店　2000 年
10）尾澤重知　前掲書 3）
11）D. W. Johnson 前掲書 7）
12）Johnson らは、協調学習に不可欠な要素として、①グループメンバーは浮き沈みを共にする関係であることを認知すること、②学生間における励まし合いが行われていること、③個々のメンバーにおける行動に関する説明責任をもつこと、④対人関係における社会的技能をもつこと、⑤グループ間における十分な協同的評価が行われることの 5 点を挙げている。特に、促進的相互交流を中心的な要素として位置づけている。（D. W. Johnson 前掲書 7））
13）三宅なほみ『インターネットの子どもたち』岩波書店　1997 年
14）社団法人日本介護福祉士会『介護福祉士の教育のあり方に関する検討会報告書　－養成カリキュラムに関する中間まとめ－』2007 年
15）介護福祉士のあり方及びその養成プロセスの見直しなどに関する検討会『介護福祉士のあり方及びその養成プロセスの見直し等に関する検討会』報告書　2006 年
16）これら 3 つのプログラムを選択した理由は、①において教えるという行為を通して 2 年生から積極的にかかわり、②でお互いの意見を交換し合い相互のかかわりを体験し、③で互いが協力しあってプログラムをすすめるといった、3 段階で関係性を深めることを期待したからである。
17）森朋子・山田剛史「初年次教育における協調学習が及ぼす効果とそのプロセス　－学生同士の〈足場づくり〉を中心に－」『京都大学高等教育研究』第 15 号　2009 年　pp 37–46
18）藤原武弘「親和動機」『発達新詩学用語辞典』北大路書房　1991 年　p 163
19）森朋子「初年次における協調学習のエスノグラフィ」『日本教育工学会論文誌』33（1）2009 年　pp 31–40
20）杉浦健「2 つの親和動機と対人的疎外感との関係　－その発達的変化－」『教育心理学研究』48 号　2000 年　pp 98–106
21）森朋子　前掲書 18）